

研究集会報告

東京大学史料編纂所では東アジアにおける史料収集事業の一環として、ロシア連邦における日本関係史料の調査をすすめてきた。

二〇〇三年三月十三日、ロシア国立海軍文書館(サンクトペテルブルグ市)からウラジミール・ソボレフ館長、マリナ・マレヴィンスカヤ副館長をお招きし、日露関係史料をめぐる国際研究集会を開催した。日本側報告者は大学院人文社会学系研究科藤田覚教授に御願いし、研究集会ではソボレフ館長の記念講演と藤田教授・マレヴィンスカヤ副館長の二報告が行なわれた。この三つを以下に収録する。

現在海軍文書館との研究協力によって、同館が所蔵する日本関係史料目録の作成が進行しており、二〇〇三年六月には共同事業と学術協力に関する覚書が結ばれている。また、本研究集会の実施にはサンクトペテルブルグ国立大学ワジム・クリモフ教授から多大なるご尽力をたまわった。付記して謝辞にかえたい。

(東アジアWG・保谷記)

サンクト・ペテルブルグの都市建設史より

—— 建都三〇〇年を記念して ——

一七〇三年、三位一体祭の日である五月十六日、礼拝式の後、ピョートル大帝は大礼服のまま僧侶・将軍・高官を伴って小舟でリュンストランドにやって来ました。

聖水式で祈禱し町の定礎の祈りの言葉を捧げると、ピョートル大帝は踏み鋏の手に取り深い溝を掘って、更に芝士を三片切り取ります。溝の中に石版で箱が組み立てられ、その中に大帝は聖アンドレイ・ペルヴォズヴァンヌイの聖骸が納められた櫃を降ろし、箱を石版で蓋をすると、その上に次のように銘が刻まれたのです。「一七〇三年五月十六日イエ

V・S・ソボレフ

ス・キリストの藉身を以て帝都サンクト・ペテルブルグが全ロシア専制君主である偉大なるツァーリ・大公ピョートル・アレクセエヴィッチによってその礎を置かれた」。

続いて大帝はその石版の上に三片の芝士を置いて、次のように言いました。「父と子と聖霊の御名において、アーメン。帝都サンクト・ペテルブルグの礎はここに置かれり」。

居並ぶ者は皆新都の礎が置かれたことをツァーリに祝福しました。祝砲が一斉に放たれ、四方遠くまで鳴り響きます。

ツァーリが到着した際に現れ、それまでその頭上高く舞っていた鷲が舞い降りてきて、ツァーリ・ピョートル一世が白樺の若木で作った門の上に留まりました。

祝砲が二発、ツァーリが要塞の稜堡⁽¹⁾のひとつに礎を置いた時と白樺の門が清められた時に鳴り響いのです。

二時前にはピョートルはニエンシャンツに戻り、ペテルブルグ建都の祝典が行われ、盛大な祝宴がその最後を飾りました。

要塞の建設が速やかに進むように、ピョートル大帝はメニシコフ、トゥルベツコイ、ナルイシキン、ゴロフキン、およびゾートフにそれぞれ稜堡、当時の呼び名で「ラスカート」とよばれるものを一個所ずつ監督するよう命じました。自らもその一つを「君主の監視」⁽²⁾下に置きましたので、要塞の堡壘を積む作業は一段と捗ったのです。作業に従事したのはロシアの兵士、スウェーデン人捕虜、シリツセルブルグで修理の経験を持つロシア人土工です。要塞と並行して、皇帝のための小さな家が丸木で作られ、ペテルブルグ地区に作業の主な監督者であるゴロフキンとメニシコフの丸木の家と労働者のための藁小屋が作られました。

工事に特に熱心に取り組んだのはメニシコフで、皇帝の名の日である六月二十九日には受け持ちの稜堡を積み終わったのみならず、稜堡の中に兵営までも造ったので、ピョートルはそこで一七〇三年の自分の名の日を祝ったのです。

しかしながら、スウェーデンはネヴァ川をロシアに簡単には譲ろうとはせず、スウェーデンの将軍クロニオルトは、一七〇三年七月強力な部隊を引き連れてヴィボルグ⁽³⁾から出陣しセストラ川の岸に陣取りました。七月七日ピョートル大帝はロシアの将軍チェムベルスと六連隊を率いてクロニオルトを迎え撃ちスウェーデン人を退却させたのです。

一七〇三年十月には既に要塞の堡壘が完成し、十一月にネヴァ川に最

初の異国の「客」であるオランダの商船が姿を見せ、船長は贈り物として金貨五〇〇個を進呈され、ペテルブルグの軍務知事メニシコフに正餐の饗応を受けました。

その後、皇帝はネヴァ川の河口を視察した際、コトリン島に注目し、建設までもないペテルブルグを海から守るために、第二の要塞をそこに置くことを決心しました。一七〇四年コトリン島に聖アレクサンドルの名を冠した要塞の建設が始まり、五月四日に皇帝はこの要塞で清めの儀式を行い、クロンシュロット⁽⁴⁾と名付けたのです。

ペテルブルグの建設工事は冬の間も休まず続けられ、聖枝祭の日曜日には要塞に聖ペテロと聖パウロの名を冠した教会、つまりペテロパヴロフスキー寺院が完成し、清めの儀式が行われると、皇帝自らそこで一七〇四年四月七日の大土曜日⁽⁵⁾に聖体拝領を行いました。

この時期の都市建設は、主に現在のペテルブルグ地区にある要塞の周囲から広がっていきました。というのは、ここネヴァ川の此岸に町を開くことが、ツァーリの意向だったからです。ペテルブルグ地区の通りの名前には、ルジェイナヤ（鉄砲鍛冶）、ルイバツカヤ（漁師）、グレベツカヤ（船頭）、ブカルスカヤ（大砲職人）など、その最初の住人の職種に関する情報そのまま残されています。ネヴァ川の対岸には、ピョートル大帝によって海軍省の木造の建物が置かれ、その周囲に海軍士官・水兵・職人、さらに労働者が居住するようになります。この地区に官殿と政府高官の家が立ち並ぶようになったのはその後です。

ペテルブルグの建設は文字通りスウェーデン軍の砲火の下で行わざるを得ませんでした。スウェーデン軍は一七〇四年にペテルブルグの町の領有を再び試みましたが、不首尾に終わります。スウェーデン軍のクロンシタット攻撃は撃退され、陸路もカーメンニイ島に上陸まではしたのですが、それ以上何もできませんでした。というのも、ペテルブルグ司

令官ロマン・ブリュスが一夜のうちにアプテカルスキー島に大砲陣地を設営し、小ネヴァ川に流れを遮る型に軍艦を置いたからです。大砲陣地と軍艦からの一斉射撃は一時的ではありますがスウェーデン軍を退却させました。一七〇四年八月にスウェーデン軍はロシア側が放棄したニエシヤンツを占領します。が、そこも支えきることができませんでした。ブリュスが再びスウェーデン軍を撃退したのです。

翌一七〇五年、コトリン島付近にスウェーデンの大艦隊が姿を現し、陸路兵力一万のスウェーデン軍が押し寄せてきました。ペテルブルグは危機に曝されるのですが、結局スウェーデン軍は今度も数度の流血戦の後、戦果を得ず撤退したのです。

スウェーデンの攻撃と度重なる洪水にも関わらず町の建設は止まることはありませんでした。ロシア全土から毎年四万人の労働者が志願をし、二ヶ月毎の三交代で建設に従事しました。ピョートル大帝自身はほとんどペテルブルグに不在でしたが、ネヴァ川の両岸には建物がほとんど建てられていきました。皇帝がメニシコフに下賜したヴァシリエフスキー島の、現在は陸軍幼年学校がある場所には官殿がそびえ立ち、ネヴァ川とフォンタンカには「夏の園」が作られます。一七〇七年の夏には、ペトロバヴロフスク要塞に土壁に替えて石壁を積む作業が着手され、既に建物が完成していた海軍省には初めて軍艦が横付けされました。海軍省のすぐ隣に一七〇七年木造のイサアキイ・ダルマツキイ教会が建てられました。海軍省の周囲と「夏の園」までのネヴァ川沿いには海軍士官の家が建てられていったのです。

一七〇六年七月、スウェーデン軍がネヴァ川上流のイジョラ付近に現れましたが、何もできずに引き揚げました。ピョートルの方はペテルブルグに対するスウェーデン軍の絶えざる攻撃を制裁するために、ヴィボルグへの遠征を敢行しますが、占領することはできず引き返します。

一七〇八年、スウェーデンは一万三千人の陸上部隊と二十五隻の戦艦でペテルブルグを占領すべく最後の試みを行います。数において劣るロシア部隊の砲火をくぐって、スウェーデン軍はトスナ川河口付近のネヴァ川を渡り、ソイキナ・ムイザに陣取ります。アブラクシンは彼らを追撃し、三千人を捕虜にしました。一方、スウェーデン艦隊は一七〇五年の二の舞を再び演じることを恐れ、何の行動も起こさず岸近くの海上に停泊し続けるに留まります。一七〇九年六月二十七日のポルタヴァの戦いで、ペテルブルグは最終的にロシアに帰属することで決着し、以後スウェーデンがペテルブルグの住民を脅かす行為はなくなりました。

ピョートル大帝は、特別な愛情をもって、ペテルブルグを美しくし整然とした町並みを作り出すことに情熱を注ぎました。新都は大いにピョートルの気に入り、町を「パラダイス」、つまり楽園と名付けます。海沿いの町ペテルブルグに愛着を示し、即位した都であるモスクワに滞在することがますます少なくなっていました。

ポルタヴァの勝利以後、ピョートルはロシアの首都をモスクワに代えてペテルブルグにするという考えを抱くようになります。ヴィボルグ占領時の一七一〇年、ピョートルの心の中でこの考えは最終的に動かぬものになり、ペテルブルグでは早速精力的な作業が始められます。この目的のために特設された「建設官房」がその作業を指揮したのです。

ポルタヴァの勝利を記念して、ヴィボルグ地区に、現在でも残る聖サムプソニイ教会が建立されますが、今日でも聖サムプソニイを称える祭礼はポルタヴァの戦いの日に行われています。一方ヴィボルグ遠征の後、ペテルブルグ地区の要塞の近くにトロイツキイ寺院が建てられます。寺院はその後焼失してしまい、まったく異なった設計で再建されました。その後一九三二年には廃絶されています。

一七一〇年の夏に、ツァーリの官殿―当時は「冬の家」と呼ばれまし

たがーの建設が始められます。それまで皇帝は要塞の近くの小さな家に住んでいたからです。この宮殿は現在の冬宮からほど遠くないところ、ネヴァ川と冬運河の岸辺にありましたが、現在ではエルミタージュ劇場の建物が立っています。ちなみに、この宮殿で一年半後にピョートル大帝とエカテリーナ・アレクセエヴナ成婚の儀が盛大に行われたのです。

同じ一七一〇年にアレクサンドル・ネフスキー修道院が着工され、すぐにその中に木造のブラゴベシエニエ（聖母受胎告知、生神女）教会が造られます。完成し、清めの儀式が行われたのは一七一三年です。

一七一年、ピョートルが特に愛した「夏の園」の中に、今もそのままに残っている夏宮の建造が始まります。

翌一七二二年にはペテロバヴロフスク要塞でそれまでの木造の教会に代えて新しい石造りの教会が建てられ、フォンタンカ、つまり当時宮廷勤務者が住んでいた近くには、聖シメオン聖アンナ教会が建てられました。

この時期のペテルブルグの建設の早さは、一七二一年から一七二二年の一年間に三三二戸の家が建設されたことで証明できます。この数は当時としては驚異的なものです。

一七二三年十二月四日、ピョートル大帝は、廷臣は従来のモスクワではなくペテルブルグに住むべしとの勅令を出します。廷臣の住宅用として、現在のリテイヌイ大通り近くの場所が当てられました。この勅令によって首都としてのモスクワの運命に終止符が打たれます。廷臣は新しい首都へ移り住むようになり、一七二四年だけでペテルブルグに更に四八五戸の新しい家が建てられ、ペテルブルグの町の建設は加速されたのです。

一七二五年、フォンタンカの、現在のソリヤーヌイ・ゴロドークの場所に、私人の船の建造のために「私営造船所」の建設が始まり、付属し

た教会も建てられます。現在のパンテレイモン通りの聖パンテレイモン教会です。ヴィボルグ地区には軍病院が作られ、現在はもうない海軍省の建物の周囲の堡壘に大理石が張り巡らされます。また、ピョートルの最初の「冬の家」宮殿は新しく建てなおされ、更に広くなり、その建物のひとつでペテルブルグ最初の「夜会」⁵⁾が催されました。

一七二六年になるとペテルブルグは都市に成長し、家屋所有者の資金による通りの舗装、および街灯設置が始まります。これは当時の西ヨーロッパにはほとんどなかったものです。都市建設は休むことなく続けられ、熟練した労働力の需要が増大したため、流刑を刑罰とすることで石造りの家の建造を禁止する特別勅令が公布され、全ロシアからペテルブルグの建設のために石工が集められたほどでした。

ペテルブルグの創始者である専制君主は、自分が創設した都ができるだけ立派で美しく整備されたものであることを望んでいました。彼は新首都の建設に関して、君主たる自己の全意志を実現できるような技師を外国で探し始めます。君主はヴァシリエフスキー島全体にアムステルダムやベネチアのように運河を張り巡らし、それにより、しばしばペテルブルグの住民を脅かしていた洪水の際に、フィンランド湾からの風で逆流する水を分散させることを考えました。

ピョートルが必要としていたような技師が遂にパリで見つかり、建築家長、すなわちペテルブルグの建設総指揮者として年俸五千ルーブルで招聘されます。これが有名なフランスの建築家ジャン・バティスト・アレクサンドル・レブロンです。

一年後の一七二七年、レブロンはおそらくピョートル大帝の参加も得て、ペテルブルグの都市計画を作成しましたが、残念ながら計画は実現されないままに終わります。この計画によれば、ペテルブルグの構成範囲は、ヴァシリエフスキー島、ネフスキー通りがあるネヴァ川の左岸か

らフォンタンカまでと、今日のペテルブルグ地区です。ペテルブルグの市街区域は、レブロン計画では、これらの地区を環状に取り囲む切れ目のない防壁の内側に置かれることになっていました。この計画によれば、ヴァシリエフスキー島とペテルブルグ地区は、正方形に町を分割する直線運河で網目状に区切られ、中心部分には宮殿が置かれました。運河を掘る際に出る土は、町全体の土地を高くするために使おうというのがレブロン考えでした。

もしレブロン計画通りにペテルブルグが建設されていれば、当時としてはよく整備された町が出来上がっていたことでありましょう。しかしながらこの計画は、様々な人物、特にメニシコフから横槍が入り、ツァーリ自身が度々不在であったことから延引され、一七一九年三月にはレブロンが亡くなったこともあり、ペテルブルグは都市建設の模範となるべき機会を逸したのです。

ピョートルが亡くなる一年前、建築家のトレズイニが「十二中央機関」つまり省庁の建物を完成させます。現在これらの建物には大学が入っていますが、外観は当時とほとんど変わらないままです。

ピョートルが亡くなった一七二五年には、ペテルブルグの人口はすでに十方に達していましたが、町は美しくかつ整備されていて、外国人客の多くが目を見張るほどでした。

当時は、現在のペテルブルグが占めている空間すべてが、建物で埋まるにはほど遠い状態でした。フォンタンカとリテイヌイ大通りより先は、郊外の別荘とモスクワから移ってきた廷臣の家々のある所、つまり現在のシバレルナヤ通り、ザハリエフスカヤ通り、セルギエフスカヤ通り、フシタツツカヤ通りを除いて、森の生い茂った広大な無人の地が広がり、しばしば盗賊どもの「隠れ家」となっていました。つまりペテルブルグ地区で人が居住していたのは、ネヴァ川と小ネヴァ川の岸沿い、および

要塞近辺で、ヴァシリエフスキー島も家があったのはネヴァ河岸などに過ぎませんでした。

ペテルブルグの創始者である専制君主の死後、エカテリーナ一世の治世になって、引き続き町の建設は進められていったにも関わらず、かつてペテルブルグに移ってきた名門貴族たちは町を引き揚げてモスクワに帰っていききました。

エカテリーナの後を継いだピョートル二世の治世に入ると、宮廷関係者も皆ペテルブルグをしばしば離れ、モスクワに長く留まるようになり、首都が再びモスクワに移るといふ噂が流れたこともあって、ペテルブルグの発展はしばしば停滞しました。とはいえピョートル二世の治世の一七二七年に、イサアキイ広場からヴァシリエフスキー島の現在の海軍幼年学校がある所までをつなぐ浮き橋がネヴァ川の上に完成しました。

女帝アンナ・イオアノヴナが即位してペテルブルグは再び活気を取り戻しました。現在の冬宮の場所に新しい大宮殿を建てる工事が、女帝によって着工されたからです。新たにイサアキイ橋が架けられ、ヴァシリエフスキー島に聖アンドレイ・ペルヴォズバンヌイ教会と教会付属の養老院などが建てられました。

一七三七年には再び「ペテルブルグ建設特別委員会」が設立され、今後の都市計画が策定されます。その年の千戸以上が焼失した大火の後、初めてペテルブルグに警察管区制が導入されました。

一七四〇年に即位した女帝エリザベータ・ペトローヴナの治世になると、新たな美しい建物が町を飾りますが、住民数はやがて減少へと向かい、一七五〇年にはせいぜい八万人ほどになります。「ピョートルの娘」時代の建物としては、一七四八年に建てられたスモーリヌイ修道院と一七五一年有名な建築家ラストレリによって建てられたアニチコフ宮殿を挙げることができます。

エカテリーナ二世の即位で、ペテルブルグはピョートル時代と同様に、急速に発展を遂げ、一七六五年には住民数は十五万に達し、町の警察管区も再編成され、ネヴァ川の河岸通りには花崗岩が敷かれ、舗装道路も整備されます。この時代には一七五五年女帝エリザベータによって起工された冬宮が完成し、カメノオストロフスキーとタヴリーチエスキー両宮殿が建てられ、ムラーモルヌイ宮殿の建設が完了します。セナート広場にはピョートル大帝の記念像が立てられ、一七八二年に除幕し、芸術アカデミーの建物も完成しました。有名な建築家ラストレルリの設計で一七五七年に着工された、巨大なゴスチンヌイ・ドヴォールも完成し、同じくラストレルリによって今日もある貴族幼年学校が建てられます。さらにアレクサンドロフスキー修道院にトロイツカヤ教会が建てられ、大理石のイサアキイ寺院の工事が始まり、優美なニコラ・モルスキー寺院、ペトロパヴロフスキー寺院の鐘楼、その他多くの建物が建てられていきます。

ところで、一七七七年九月十日ペテルブルグで大洪水が起こります。水位は十フット、つまり三メートル以上に及び、町は冠水し、冬宮広場では船が浮かび、小さな丸木小屋などは水でネヴァ川の一方の岸から他の岸に押し流されたほどでした。

ペテルブルグの人口はその後益々増え続け、エカテリーナの専制後継者、パーヴェル一世の時代にはすでに四十二万人に達しています。

パーヴェル一世の治世は短期間でありましたが、ピョートル大帝の記念像のある軍工廠、海軍幼年学校の建物、ルミヤンツェフとスーヴォロフの記念像が、ペテルブルグの町を華麗に飾りました。

栄光あるアレクサンドル一世の治世に入つて、ペテルブルグはさらに充実発展を続けます。エラギンスキー宮殿とミハイロフスキー宮殿、今日まで残っている海軍省の新しい建物、取引所や参謀本部の建物、マリ

ンスカヤ病院などが建てられます。カザンスキー寺院もアレクサンドル一世の治世に完成しました。

しかし、ペテルブルグが一番美しくなったのはニコライ一世の時代で、焼失した冬宮が新たに立て直され、マリンスキー宮殿、アレクサンドリンスキー劇場、公共図書館、元老院、宗務院の建物が立てられます。また、皇帝アレクサンドル一世の記念像、つまりアレクサンドル円柱やバルクライ・デトリ、クトゥーゾフ、クルイロフの記念像、モスクワとナルヴァの二つの凱旋門などが姿を現します。

一八二四年十一月七日ペテルブルグはふたたび大洪水に襲われます。水位は十三フット、つまり約四メートルにも達し、大量の建物が損壊し、倉庫からは何百万ルーブリの商品が流失、かなりの犠牲者が出ます。

アレクサンドル二世の時代には、ペテルブルグの人口は八十五万人を超え、一八五八年に竣工したイサアキイ寺院の雄大な建物、エカテリーナ大帝とニコライ・パヴロヴィッチの記念像など多くの建造物によって町は美しく飾られました。浮き橋のボスケレンスキー橋の代りに、新たに造られた固定のアレクサンドロフスキー橋(リテイヌイ橋)もこの時に造られました。

その後、ペテルブルグは発展の一途を辿り、住民の数も増加し、二十世紀の始めには人口百五十万、戸数一万七千、通りの数も七百以上を数えるに至ります。

簡単ではありますが、以上がロシアの北の都、サンクトペテルブルグ建築史の基本的発展段階、道標です。

【注】

(1) 稜堡とは五稜郭の要塞建築物。ペトロパヴロフスキー要塞は稜堡だが、六稜郭。

- (2) 「ビョートル大帝の稜堡」はネヴァ河岸トロイツキイ橋のたもと。
- (3) ヴイボルクは当時、フィンランド全土と同様、スウェーデンに属していた。
- (4) 今日のクロンシュタット。
- (5) 「夜会」とはビョートル時代にビョートル自身によって導入されたもので、客を招き、おしゃべりやダンス、音楽演奏を楽しむ夕べのこと、この時代までロシアにはなかった。

(翻訳…有泉和子)